

一人で悩まず、相談して大丈夫

2月4日～10日は『滋賀県がん向き合同週間』

日本人の2人に1人はがんになると言われており、死因の第1位になっています。

がんになると、治療や副作用のこと、お金の仕事のこと、毎日の暮らしのこと、がんとの向き合い方などさまざまな悩みや心配事が出てきます。このような際に活用できる情報・相談窓口をご紹介します。

①がん情報が

滋賀県のがんに関する情報（がんの知識・治療法・療養・体験談等）が見られます。

がん情報が

②がん相談ホットライン

（電話相談）

看護師や社会福祉士に無料で相談できるホットラインです。

たとえば、「今後の生活のことが心配」「セカンドオピニオンとは?」「抗がん剤の副作用が不安」「家庭でできることは?」などの相談を

していただけます。

☎03-3541-7830

毎日（祝日・年末年始を除く）

午前10時～午後1時

午後3時～午後6時

③専門医によるがん無料相談

（電話相談・面談相談）

まずは予約してください。

☎03-3541-7835

月～金曜（祝日・年末年始を除く）

午前10時～午後4時

公益財団法人 日本対がん協会

<http://www.jcancer.jp>

☎03-3541-4771

②・③は、新型コロナウイルス感染症により、相談日が縮小されています。詳しくはホームページをご覧ください。



滋賀県健康づくりキャラクター「が」のハグ&クミ

◆問い合わせ先 保健センター

☎0748-52-6574

青雲之志

～町長コラム～

日野町長 堀江 和博

お正月にTV放送された「1億人の大質問!笑ってコラえて!」のスペシャル番組にて、日野町在住の96歳と93歳の女

性お二人が「村人グランプリ2020」を受賞されました。年齢を感じさせない、はつらつとしたお二人の掛け合いに、お茶の間はもちろん、所ジョージさんや明石家さんまさんも魅了されたの受賞でした。特に、お二人が話されていた「どす」といったような「京言葉のような上品な言葉遣い」にひどく感銘を受けておられました。

お二人の言葉を拾ってみますと、「私の姉がもう100歳どすがな」「しっかりしてはりますねん」「畑見に来たんどうすよ」などがありました。色々と調べてみますと、それは「江州弁（近江ことば）」と言われるものです。古くから文化的・人的交流が盛んであったことから京言葉と共通する部分も多いの

ですが、京言葉と比べると田舎風であるとのこと。

琵琶湖博物館の学芸員の方の資料では、「近江ことば」は「人の心をあたたかく和ませる力」をもち、「独特の音韻とやわらかい言い回しによって、人と人をつなぎ、場を和ませてくれる」ものと位置づけられています。「親しみがある」「やわらかい」「あたたかい」「奥深い」「楽しい」「気取らない」「ぬくもり」「おっとり」「おだやか」といった印象を持つ方が多いようです。この言葉を聞いた時、大正15年生まれの祖母のことを思い出しました。祖母が電話口やお客さん相手にこの言葉遣いで話していたことを懐かしく感じました。

「ことば」は文化そのものであり、それを使う人達の人柄やその地域を表すとも言われています。最近はどういった言葉を使う人が少なくなっていると言われています。ぬくもりのあるこの言葉が、いつまでも大切にされる町であってほしいと感じた新年でした。

温故知新

日野歴史探訪

私達の住む日野町には、52の大字があり、それぞれの地域が豊かな自然と歴史文化でいろどられています。
温故知新では、町内各大字の歴史と代表的な文化財をシリーズで紹介していきます。

清田

大字清田は、南比都佐地区の北端、水口丘陵の谷筋の北の入り口にあり、日野川左岸大の平野部に位置しています。

江戸時代には、「清水脇村(清水村とも)」と、「五反田村」の2か村に分かれており、それぞれ領主が異なっていました。それが明治7年(1874)に合併し、各村の名の一字を取って「清田村」となりました。

丘に残る中世の城跡

清田地区は、中世、甲賀郡と日野を結ぶ要路であった「迫谷道」の起点にあたります。

沿線には土豪である儀俄氏の城とされる上迫城や、家臣の三木氏の城とされる下迫城の跡が残っているのと同様に、清田地区の西部に位置する通称「城山」にも、「清田城」と

称される中世の城跡が残っています。

三木氏ゆかりの地

実は、これまで清田城に関する時代の記録は見つかっておらず、この城の南南東約700メートルにある下迫城の支城であったという伝承のみが残っています。

下迫城の城主とされる三木氏については、応永29年(1422)12月7日に三木正良が、清田地区の北に位置する十禅師の土地を、「十禅師妙法経導場」へ寄進したことが記録に残ります(比都佐神社文書)。この記録によると、土地は蒲生秀貞から購入し相続してきたものであり、他にも同じような土地を所有していることから、三木氏は下迫から十禅師まで勢力を広げていたことがわかります。

さらに時代が下った天正5年(1577)には、織田信長の安土

城築城の際、蒲生賦秀(氏郷)への人員派遣の命令に対し、派遣を行った三木氏と儀俄氏へ堀秀政から礼状が出されています(儀俄家文書)。

つまり、信長の時代になっても、三木氏は蒲生氏の配下として活動していたのでした。

こうしたことから、三木氏が清田に城を築いたとしても不思議はありませんが、そもそも主家とされる儀我氏と三木氏との関係や、それぞれの領地の範囲等、詳しいことはわかっていません。

清田城の謎

清田城跡は、地区からの比高約35メートルの丘陵上にあり、長さ約110メートルにわたり、4つの曲輪(平坦地)が残っています。

これらの曲輪は、全体的に削平が甘いものですが、要所に土塁や堀切を設けていることから、城郭遺構で

あることは明らかです。

さらに、谷を挟んだ東側の丘陵上には遺構が見られないことから、西方山麓を通る「迫谷道」を強く意識して築かれたものと思われます。

こうした点から、清田城は、迫谷道や北方の日野川沿いの平野部の監視を行う砦として機能したと考えられますが、そもそもここに築かれていることが謎なのです。

それは、伝承のとおり三木氏の城とすれば、主君である蒲生氏の本拠に対して砦を構えていることとなってしまうからです。蒲生氏が街道監視や連絡のために築いた臨時の城とも考えられますが、現時点では推定の域を出ない謎の城と言えます。



清田城跡近景(中央の丘陵上)